

8月1日 使徒言行録9章26～31節 今日の説教から

説教題：「平和への派遣」

私たちの江刺教会が所属する日本基督教団は、8月の第一主日を「平和聖日」と定めています。この日が定められたのは1962年のことで、それ以降この平和聖日に神様が望んでいる「平和」というものを聖書から学び、平和の実現を求めて真摯に祈りを捧げる、その時を大事に守ってきています。

第二次世界大戦、そして広島と長崎への原子爆弾投下がきっかけで平和聖日が定められたのですが、それから5年後の1967年に、戦争に対する深い反省と悔恨を込めて「第2次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」が日本基督教団総会議長鈴木正久氏によって出されました。全文を裏面に記載していますので、どうぞお読みいただければと思います。

このような告白が、日本基督教団としてすべての教会・教派の一致のもとに出されたわけではありませんが、かつての戦争を振り返り、かつて戦争に消極的に・積極的に加担してしまったことを悔いる思いの元に出されました。

私たちはキリスト者として、イエス様が「シャーローム」と語り掛けてくれるような、平和をこの世界に実現させなければいけません。そして何より、平和を遠ざける行いを悔い改めなければいけません。今日の聖書箇所に記されているパウロという人物も、かつての行いを悔い改め、イエス様の福音を告げ知らせることで平和の実現に尽力した人物の一人でした。

パウロはダマスコに向かう途中でイエス様に出会い、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と、語り掛けられました。パウロはその声から、自分に呼び掛けてきているのは神様だと理解したのでしょう、「主よ」と答えますが、しかしパウロは神様を迫害した覚えはありません。自分が今までしてきたのは正しいユダヤ教の教えを理解しない「イエス」という人物の弟子達に対する迫害であり、それはパウロにとっては「神様の敵を倒す」という、栄光の働きとして理解していました。しかし、神様としか思えないような声は「なぜ、わたしを迫害するのか」と語り掛けています。その混乱の中でパウロは声に対して、「あなたはどなたですか」と問い合わせました。その人物こそが、自分が迫害してきた人々の主であり、自分が従うべき神様、子なる神イエス・キリストだったのです。

イエス様に出会い、イエス様の言葉に従ってダマスコに向かい、そこで起きた「目からうろこのようなものが落ちた」出来事によって、パウロはイエス様を宣べ伝える人へと変えられました。しかし、パウロの迫害者としての過去は消えません。特に今日の聖書箇所では、イエス様の弟子たちの仲間に入ろうとしても信じてもらえず、エルサレムに向かいイエス様を教えようとしても、今度はユダヤ人から命を狙われるようになりました。しかしパウロはそれらに屈することなく、カイサリアへ、タルソスへと場所を移しながらイエス様の言葉を伝え続けました。その活動はユダヤ・ガリラヤ・サマリヤへと広がっていき、パウロが宣べ伝えたその御言葉によって神様が望む平和を実現することが出来ました。キリスト者を殺してしまおうと思っていたパウロは、悔い改めによって、洗礼によって平和を実現する者となつたのです。

私たちがかつて洗礼を受けた時、それまでのイエス様を知らなかつた人生の中で大切に思つていた様々な事柄ではなく、イエス様の言葉が、神様の言葉が私たちを導く最も大切なものだという事を知ることが出来ました。自分たちの利益や都合よりも、神様の望む平和こそが尊いものであることを教えてもらいました。だからこそ私たちは悔い改め、平和を実現する者としての業を神様から期待されていることでしょう。私たちに平和が与えられていることに感謝し、私たちがこの地上において平和を実現するものとして用いられることに感謝をしながら、この8月の、これから歩みを共に進めていきましょう。